〔教育実践報告〕

生徒参加実践としての学食改革

― 宝仙 Marché の空間デザイン ―

坂　本　徳　雄
助　川　晃　洋

Ⅰ　参加の権利と実践

近代の子どもの発見と保護の必要から出発した子どもの権利の思想は、時代の進展とともに、子どものとらえ方を、保護の客体から権利を行使して積極的に社会に関与し、参加していく主体へと変えていった。児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）は、参加主体としての子どもをエンパワーし、多様な参加実践の創造を促している[(1)]。そして今日では、各地の学校において、子どもが変革的な意志を持ち、自分たちが過ごす環境の改善を学校側に要望し、その実現に向けて、もちろん教師や関係者とともに、しかし大人に従属するのではなく、自ら率先して動くという状況が見られる。その一つの優れた事例として、宝仙学園中学・高等学校における学食改革の取り組みを挙げることができる。同校は、東京都中野区に所在し、中高一貫の共学部理数インターと高校女子部の２部門を併設している私学であり、2015 年４月に富士晴英校長と坂本徳雄副校長（＝本稿筆頭著者）が着任して以来（富士は現在に至る、坂本は 2019 年３月まで）、生徒主体の学校づくりを精力的に進めている。

Ⅱ　学食像の転換

宝仙学園中学・高等学校では、2012 年４月以降、いわゆる学食として、宝仙食堂の営業を行ってきた。しかし業務委託先の経営不振に起因するメニューのマンネリ化もあって、生徒数が増加しているにもかかわらず、利用者が減少の一途を辿り、学園からの補助金を増額して値段の据え置きに努めたものの、事態は一向に好転しなかった。こうした状況が続いていた 2016 年４月２日の職員会議で、生徒指導部の渋谷牧人教諭から次のような提案がなされ（当日配付資料「生徒支援部会方針」より一部抜粋）、了承されている。

「学食のメニューに生徒の意見を」という声が生徒から出ている。食堂、生徒ホール全体について、食堂の環境改善と生徒ホールの自動販売機の中身の精査を行う（高校生限定でカップラーメンを販売することを認めるか、そもそもどのような購買ニーズがあるか）。管理職とも相談の上、生徒の声を取り入れたものにしていく。

そして学食改革の取り組みは、理数インター創立 10 周年記念事業（2016 年度）と宝仙学園創立 90 周年記念事業（2017 ～ 18 年度）の両方に組み込まれたことで、いよいよ本格化していく。2018 年１月には新たな運営会社が選定されている。２～３月には同社担当者、生徒会本部役員、入試広報部教員の三者協議を経て、カフェテリアへのイメージチェンジと「お腹いっぱい食べたい」、「おいしい」、「健康によい」といった生徒の希望や嗜好に合ったメニューの開発が進められている。４月 11 日には開所式が行われている。同日の第 97 回校長 Blog「宝仙 Marché のオープニングセレモニー」では、次のように述べられている[(2)]。

食堂業者が代わることになり、12 日から、新しいスタッフとメニューで、食堂がスタートすることになりました。

これを機に、名前を宝仙 Marché（マルシェ。フランス語で、市場という意味です）に改めようと思います。

そもそも、食堂改め Marché や図書室という場所は、すべての生徒に開かれている場であり、人や本との出会いの場であり、「知的で開放的な広場」の象徴的な場になってほしいと、私は思ってきました。

もちろん、一朝一夕には成就しませんが、時間をかけて、創意工夫を重ね、わくわく感のある場にしていこうと考えています。

そのためには、生徒の協力が必要です。

みんな、いろいろなアイデアを、広報室や図書室に持ち寄ってほしい。

その機運を盛り上げるために、わずかなおすそわけだけれど、今日は、試食会です。

わいわいやりながら、学校を楽しくしていこう！

その後、宝仙 Marché は、二度の内装工事、サインディスプレイの設置、新しいテーブルとイスの搬入、蛍光灯の交換、券売機の変更など、一連の施設整備を経て、ランチを「食べる」場としてより一層充実したことはもちろん、「集う」、「語らう」、「憩う」、「遊ぶ」、「学ぶ」といったことが可能な多目的スペースとしても位置づけられた。2019 年１月８日には、新装公開を兼ねた２学期お疲れ様＆新学期頑張ろう会が行われている。13 日の第 129 回生徒 Blog「宝仙 Marché リニューアル！＆新年パーティー」では、次のように述べられている[(3)]。

こんにちは！生徒会執行部です！

なんと！冬休みに、宝仙 Marché の内装がリニューアルしました！

宝仙 Marché とは、食堂のことで、春から着々と、メニューや椅子・机などが進化してきました。

そして今回は！壁の一部がレンガ調になり、照明も調光のできるものに変わりました！！

今までと雰囲気がかなり違います！

また、始業式の１月８日に、Marché にて、リニューアルのお披露目もかねた、パーティー部によるパーティーが開かれました！

有志の生徒たちによる出し物もあり、とてもにぎやかな会となりました。

これからも、宝仙 Marché は更なる生徒たちの憩いの場になるよう、進化していきます！

よろしくお願いします！

感嘆符が多用され、高揚感が表現されていることからわかるように、食堂のリニューアルについて、生徒からは好意的に受けとめられた。生活の場としてのアメニティ（快適さ）の追求が、アクティビティの誘発につながった（つながっていく）ものと考えられる。

Ⅲ　エージェンシーとウェルビーイングの視点

DeSeCo や Education　2030 など、OECD が組織した国際的な教育改革プロジェクトを契機として、近年の我が国では、子どものエージェンシー（agency）[4] とウェルビーイング（well-being）[5] に注目が集まっている。エージェンシーは、人間の属性、それも人間が行為する際の主体性、当該の行為を可能にする能力を指す概念であり、行為（の）主体性、行為能力などと訳出することができる。ウェルビーイングは、個人、事物、共同体における心地よい生、状態の良好性を表す概念であり、福祉、福利、厚生、健康、（食）養生、幸福（度）、安寧等々、文脈に応じて様々に意訳されている。そして上述した宝仙学園中学・高等学校の取り組みは、生徒のエージェンシーが発揮され、彼／彼女らのウェルビーイングが向上したケースとして意義づけることができるように思われる。しかしそう断言するためには、関係する理論的な知見と実証的なデータを照合し、客観的に裏づけることが必要である。今後の課題としたい。

注

（１）助川晃洋・坂本徳雄「生徒参加による学校改革の推進－体育祭における構築・運営主体の移行－」『教育学論叢』第 38 号、国士舘大学教育学会、2021 年２月、pp.93-104.

（２）https://www.hosen.ed.jp/blog-ghs/15590/（2021 年 10 月４日アクセス）

（３）https://www.hosen.ed.jp/blog-ghs/19084/（2021 年６月 11 日アクセス）

（４）助川晃洋「教育改革における子どもの主体性の希求－ OECD の『学習者のエージェン

シー』概念に関するメモランダムー」『国士舘人文科学論集』第２号、国士舘大学大学院人文科学研究科、2021 年２月、pp.47-54.

（５）助川晃洋『教育方法改革の理論』春風社、2018 年、pp.53-72.（初出掲載「キー・コンピテンシーと“well-being”－ DeSeCo プロジェクトにおける両者の関係のとらえ方とそれを支える福祉理論についてー」『宮崎大学教育文化学部紀要（教育科学）』第 23 号、宮崎大学教育文化学部、2010 年９月、pp.25-37.）

参考文献

明石要一・小川幸男「生徒会活動を通した学校活性化の方法－中学校における生徒会活動の活性化を目指してー」『千葉大学教育学部研究紀要Ⅰ：教育科学編』第 45 巻、千葉大学教育学部、1997 年２月、pp.39-59.

居場所カフェ立ち上げプロジェクト編著『学校に居場所カフェをつくろう！　生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援』明石書店、2019 年

上野淳『未来の学校建築　教育改革をささえる空間づくり』岩波書店、1999 年

学校空間研究者グループ編著『学校空間の研究　もう一つの教育改革をめざして』コスモス・ライブラリー、2014 年

工藤和美『学校をつくろう！　子どもの心がはずむ空間』TOTO 出版、2004 年

子どもの参画情報センター編『子ども・若者の参画　R.ハートの問題提起に応えて』萌文社、2002 年

しみん教育研究会編著『建築が教育を変える　福井市至民中の学校づくり物語』鹿島出版会、2009 年

（社）東京自治研究センター学校施設研究会編、長澤悟監修『現代学校建築集成　安全・快適な学校づくり』学事出版、2008 年

白井俊『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来　エージェンシー、資質・能力とカリキュラム』ミネルヴァ書房、2020 年

鈴木七美・藤原久仁子・岩佐光広編著『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』御茶の水書房、2010 年

高橋勝『子ども・若者の自己形成空間　教育人間学の視線から』東信堂、2011 年

長倉康彦『学校建築の変革　開かれた学校の設計・計画』彰国社、1993 年

中西新太郎『若者は社会を変えられるか？』かもがわ出版、2019 年

日高教・高校教育研究委員会編『高校生の自主活動と学校参加』旬報社、1998 年

藤井茂樹・有本昌弘「中学校における自治活動を通したエージェンシー育成に関する一考察－数学の授業における事例研究を通してー」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第 69 集第１号、東北大学大学院教育学研究科、2020 年 12 月、pp.133-153.

堀井啓幸『現代学校教育入門　「教育環境」を問いなおす視点』教育出版、2003 年

堀内守『原っぱとすみっこ　人間形成空間の構想』黎明書房、1980 年

オットー・フリードリッヒ・ボルノウ著、大塚惠一・池川健司・中村浩平訳『人間と空間』せりか書房、1978 年

増山均『余暇・遊び・文化の権利と子どもの自由世界－子どもの権利条約第三一条論－』青踏社、2004 年

山本謙治編著『日本で一番まっとうな学食　自由の森学園食生活部の軌跡』家の光協会、2010 年

以上に加えて、注（１）の拙稿の引用・参考文献を本研究でも活用した。ただし繰り返しを避けるために、上掲のリストでは書誌情報を省略した。ご容赦願いたい。

執筆分担

ⅠとⅢは助川の単独、Ⅱは坂本と助川の共同による。

（さかもと　とくお・教職支援アドバイザー）
（すけがわ　あきひろ・教授）